
消失

猫目石

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

消失

【Nコード】

N0007S

【作者名】

猫目石

【あらすじ】

最終決戦で犬夜叉達に敗れた奈落は遂に滅した。

しかし、消滅する寸前に奈落は驚くべき言葉を残した。

「わしは四魂の玉に願をかけた。その願いは、わいの死と同時に叶うはずだ」

その言葉通りに奈落の死と同時に出現した冥道にかごめが呑みこまれ消えてしまった。

パリパリ・・・パリッ・・・パリパリッ・・・

破魔の矢に射抜かれた四魂の玉が放電する微かな音と光。

見事なまでの串刺し状態で四魂の玉は骨喰いの井戸の上に浮かんでいる。

同じように^か涸れ井戸の上に浮かんでいるのは・・・奈落。

四魂の玉に完全に心を喰わせた時の怖ろしげな妖怪の顔ではない。

犬夜叉達が記憶している元々の顔。

そう、一国の城主の若殿、^{ひとみかげわき}人見蔭刀の顔に戻っている。

眉目秀麗な白い顔。

だが、身体は無い。

頭部と僅かに繋がった脊椎のみ。

井戸の周囲は、犬夜叉とかごめ、弥勒に珊瑚、七宝、楓、そして、殺生丸、りん、邪見、琥珀といった顔触れが固めている。

ここまで追い詰められながら、奈落の表情は何処か自嘲気味で、^{むし}寧ろ不気味な余裕さえ感じさせる。

どんなに追い込まれようと必ず逃げ道を確保してきた奈落である。

その驚くべき計算高さと用意周到な手口。

油断も隙もない相手である。

今でさえ、どんな策が残されているか判ったものではない。

警戒を緩める訳にはいかない。

^{おもむく}徐に奈落が口を開いた。

「フツ・・・儂^わは四魂の玉に願を掛けた。夢幻の白夜が、かごめを斬った時にな。その願いは儂^わの死と同時に叶うはずだ」

そう言い残すと奈落は跡形もなく消滅した。

バサッ・・・

直後、かごめの背後に真円の冥道が出現した。
ゴッ……

驚く間もなく、かごめは冥道に吸い込まれてしまった。
突然の事態に慌てて、犬夜叉が、かごめを追いかけようとしたが間に合わない。

現われた時と同じように冥道は忽然と消えてしまった。

茫然とする犬夜叉と周囲の面々。

それだけではない。

更に驚愕の事実が判明する。

骨喰いの井戸が消滅していたのだ。

そんな中、奈落が滅した事を確かめようと、弥勒が右手の封印を解いた。

手甲を取り払えば、そこに在ったのは極当たり前の右手。

中央に大きく穿たれていた空洞の穴が無い。

弥勒の風穴は消滅していた。

奈落は確かに滅したのだ。

だが、四魂の玉は何処に？

緊迫する空気の中、犬夜叉が鉄碎牙を抜き放ち刀身を黒く変化させた。

冥道残月破を撃つ積もりだ。

「冥道残月破！」

ビュッ！

剣圧が走る。

刃のような形の黒い冥道が出現する。

その中に犬夜叉が飛び込んだ。

かごめの行方を追うのだろう。

犬夜叉を呑み込んで刃型の冥道も虚空に消え失せた。

それまで事態を静観していた殺生丸が、不意に、りんを右手で抱き

上げ邪見に命じた。

「・・・行くぞ、邪見」

見れば、主は、りんを抱き上げたまま空へ飛ぼうとしているではないか。

「ハッ、ハイッ！」

邪見は、慌てて殺生丸の毛皮にしがみ付いた。

「殺生丸っ!?!」

「殺生丸!」

「殺生丸さまっ!」

呼びかける珊瑚と弥勒、琥珀を無視したまま、大妖は空に消えた。
了

連作『静観』に続く

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0007s/>

消失

2011年4月18日00時15分発行